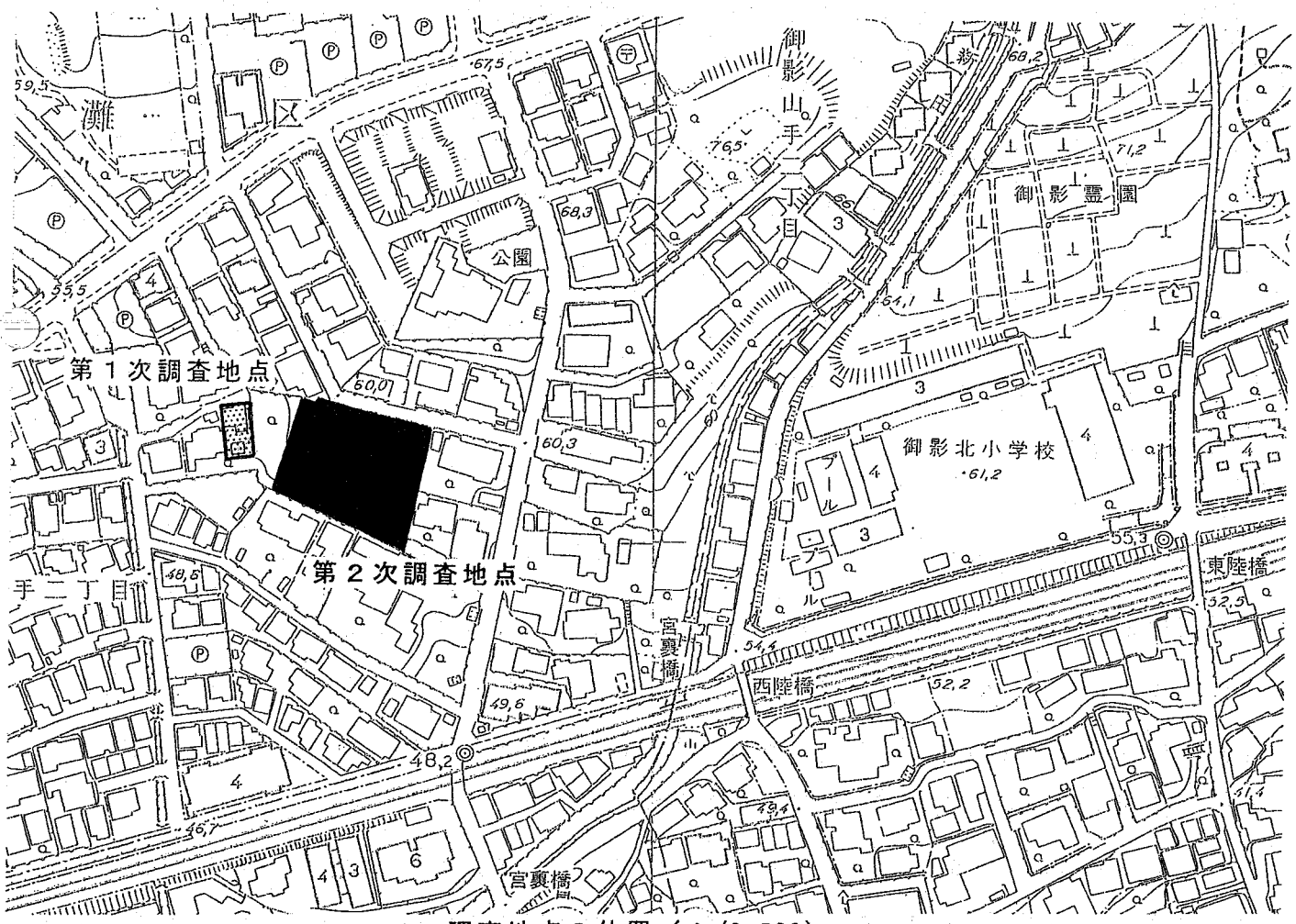
御影山手遺跡第２次調査　現地説明会資料

平成 17 年 9 月 3 日　神戸市教育委員会文化財課

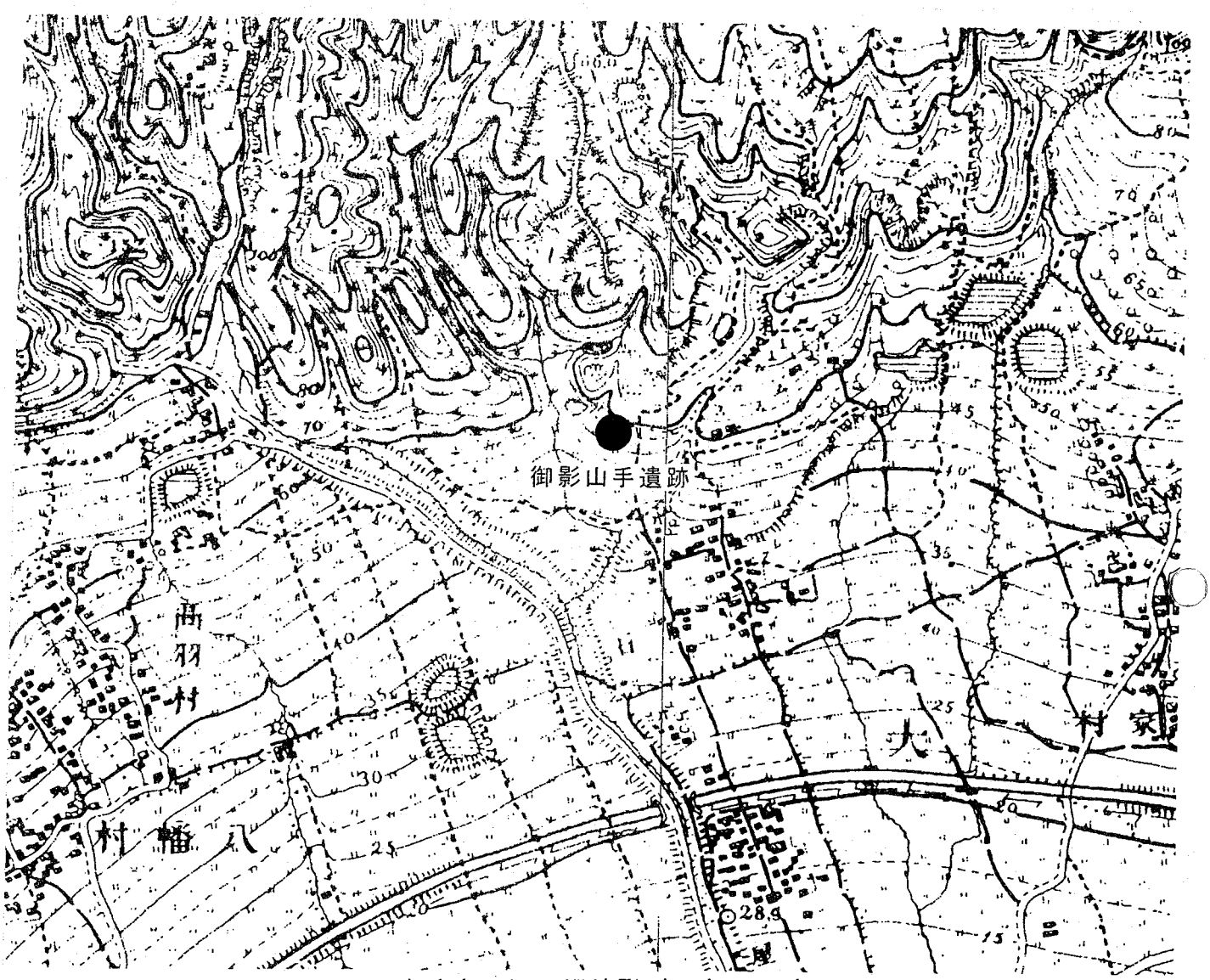
はじめに

御影山手遺跡は東灘区と灘区との境を流れる石屋川の東側にある遺跡で、石屋川の支流の新田（しんでん）川と宮谷川の２つの小さい川にはさまれた斜面地に位置しています。今ではすっかり住宅地になってしまいましたが、すぐ北隣にはかつて山から続く小高い尾根がありました。遺跡はその尾根から続く南西斜面に立地しており、したがって遺跡一帯から見た海側のながめは大変すばらしいものであったと想像できます。

平成３年２月に今回の調査地点の西隣で第１次調査が行われ、江戸時代の長方形の土坑が２基、平安時代終わり頃の掘立柱建物が１棟、鎌倉時代の谷地形が見つかっています。その他に弥生時代後期の土器も出土しており、近くに弥生時代後期の遺構が存在する可能性も考えられていました。



調査地点の位置（1/2,500）



調査地点周辺の旧地形（1/10,000）

今回の調査

今回の発掘調査はマンション建設に先立つもので、調査面積は約 1,200 ㎡です。平成17年5月30日から調査を始め、現在も調査を継続中です。

主な調査の成果

古墳３基

１号墳は調査区の西半で見つかりました。古墳の西半は調査区外に続いており、また南側は江戸時代頃の水田の段差で大きく壊されていますが、復元すると直径約 18mの円墳になるようです。上部がすっかり削られて盛土がわずかに残っているだけでした。横穴式石室の痕はありませんでしたので、遺体を埋葬した部分は古墳の上から掘り込まれていたと考えられますが、削られて全く残っておりませんでした。

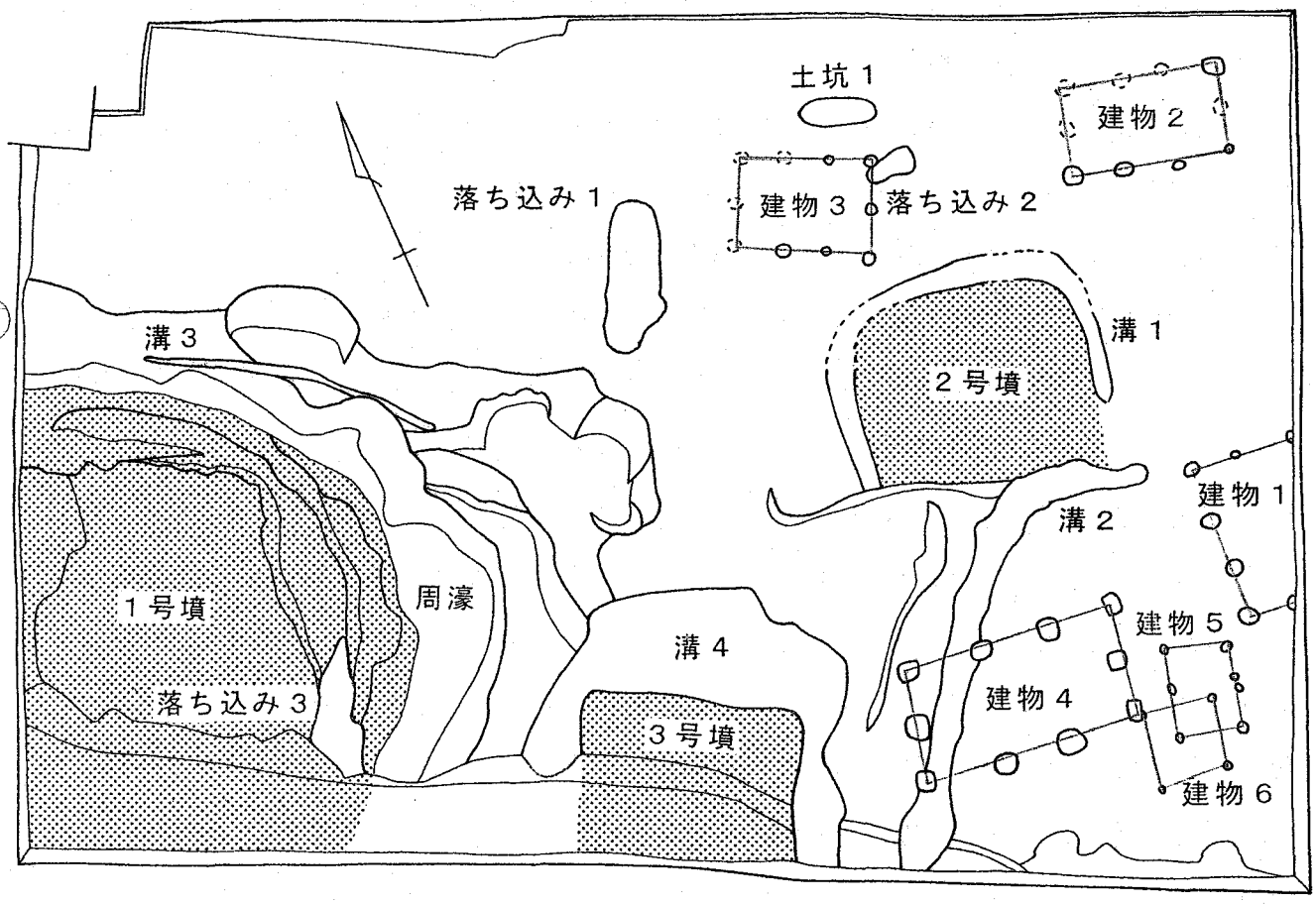
１号墳の北側から東側には周濠が掘り込まれていました。周濠の幅は約３ｍです。また周濠のさらに外側には古墳の東側では約４ｍ、北東側では幅約６ｍの自然の地形を削り込

んだ部分があります。したがって斜面地を大きく四角形に造成した中心に1号墳を築造したように見えますが、この地形が古墳を築造した当時のままの姿かどうかはよくわかりません。

周濠からは多くの埴輪(はにわ)が出土しました。大部分は円筒埴輪の破片ですが、ごく少量は形象埴輪の破片の可能性があるものも含んでいました。円筒埴輪の形や作り方から見て古墳時代後期の埴輪と考えられます。しかしこれらの埴輪はすべて小さい破片になっており、しかも奈良時代の土器と一緒に出土しています。したがって1号墳は奈良時代頃のある時に上部が大きく壊され、その後で周濠部分に奈良時代の土器と一緒に埴輪が埋まっていったと考えられます。

2号墳は調査区の東側で見つかりました。盛土は完全に削られてしまっており、北側と東西両側の溝（溝1）しか残っていませんでした。南側の溝は残っていませんでしたが、東西約8m、南北約6mの方墳に復元できます。

周囲の溝は幅 50～90 ㎝、もっとも深い部分は深さ約 30 ㎝です。



見つかった遺構（1/250）

北側の溝から古墳時代後期の土師器・須恵器の他、石製紡錘車が２点、不明鉄製品（鎌？）が１点出土しました。これらは溝の中ほどの深さから出土したため、古墳の上部が削られた時、埋葬施設から転げ落ちたものと考えられます。

３号墳は調査区の南辺で見つかりました。南側が江戸時代頃の水田の段差で大きく損壊していますが、一辺約７ｍの方墳になるようです。盛土はわずかに残っていましたが、埋葬主体は水田の段差で損壊しており全く残っていませんでした。

周囲には北側と東西両側の溝（溝４）が巡っていますが、調査区外に続くため南側の溝は確認できませんでした。溝の幅は一定しておらず、0.7～3.5m、もっとも深い部分は深さ約 50 ㎝です。また周濠のさらに外側には古墳の北東側で幅約５ｍ、北東側で幅約１ｍの自然地形を削り込んだ部分がありますが、古墳を築造した当時の姿のままかどうかは不明です。

周濠からは古墳時代後期の土師器・須恵器が出土しました。

掘立柱建物６棟

建物１は調査区の東辺で見つかりました。建物の東側は調査区外に続いていますが、桁行３間（5.3m）梁間２間以上（3.4m以上）の大きさになります。柱の最も大きなものは掘形が直径約 60 ㎝、柱痕が直径約 20 ㎝です。

建物２は調査区の中央北寄で見つかりました。建物の中心部分がちょうど現代の撹乱で大きく壊されていましたが、桁行３間（5.4ｍ）梁間２間（2.7m）の大きさになります。柱の最も大きなものは掘形が直径約 60 ㎝、柱痕が直径約 20 ㎝です。

建物３は調査区の北東隅で見つかりました。建物の西側が江戸時代頃の水田の段差や現代の撹乱で壊されていましたが、桁行３間（4.4m）梁間２間（3.2m）の大きさになります。柱の最も大きなものは掘形が直径約 50 ㎝、柱痕が直径約 20 ㎝です。

建物４は調査区の南東寄で見つかりました。桁行３間（7.2m）梁間２間（3.6m）の大きさで、見つかった中では最も大きい建物です。柱の最も大きなものは掘形が直径約 80 ㎝、柱痕が直径約 15 ㎝です。

建物５は調査区の南東隅で見つかりました。桁行２間（2.8m）梁間１間（2.1m）で、小規模の建物です。柱の掘形も直径約 20 ㎝です。

建物６も調査区の南東隅で見つかりました。桁行１間（2.5m）梁間１間（2.3m）で、小規模の建物です。柱の掘形も直径約 20 ㎝です。

それぞれの建物の柱穴からはわずかしか土器が出土しませんでしたが、建物を覆ってい

た土からは奈良時代から平安時代の土器が出土しているため、その頃以前の時期が考えられます。また柱穴の切りあい関係から建物６は建物４より古いことがわかります。

溝４条

溝１は２号墳の周溝です。

溝２は調査区の東側で見つかりました。南端は調査区外に続くため全体の長さは不明ですが、長さ17m以上です。幅約 100 ㎝、もっとも深い部分は深さ約 30 ㎝です。飛鳥時代や古墳時代の土器も出土しましたが、底からは弥生土器が多く出土しました。

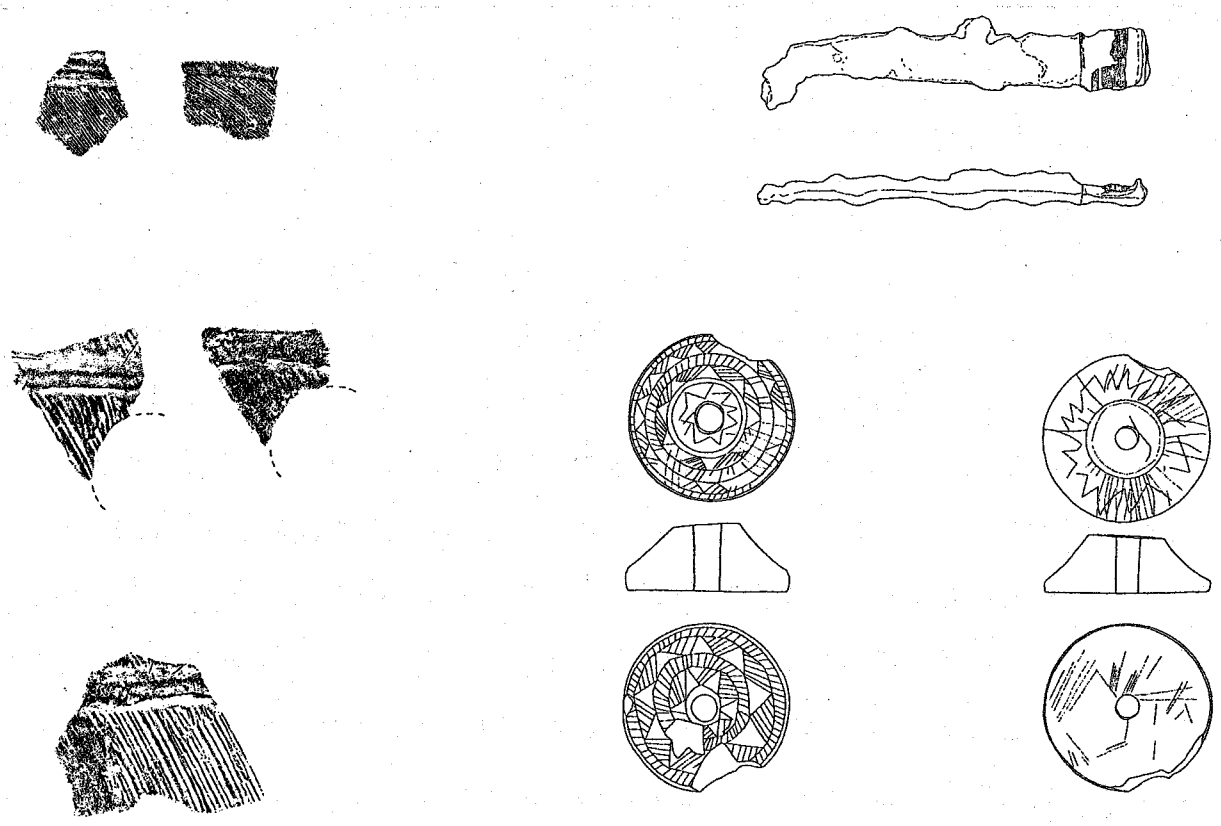
溝３は調査区の西側で見つかりました。１号墳北側の周濠北斜面に位置していますが、周濠がある程度埋まってから掘り込まれているため、奈良時代頃のものと考えられます。長さ10m、幅約 30 ㎝、もっとも深い部分は深さ約 20 ㎝です。

溝４は３号墳の周濠です。

土坑１基

土坑１は調査区の中央北寄で見つかりました。長径 2.5m、短径 1.0m、深さ約 20 ㎝です。古墳時代後期の土師器・須恵器が出土しました。

落ち込み３基



１号墳の円筒埴輪の拓本（１/４）・２号墳の鉄製品（１/４）・２号墳の紡錘車（１/２）

落ち込み１は調査区の中央北寄で見つかりました。長径 4.5m、短径 2.0m、深さ約 20㎝です。古墳時代後期の土師器・須恵器の他、埴輪が出土しました。この周辺は建物の基礎などによる破壊が激しいですが、このあたりにも古墳があったのか、あるいは埴輪を使った祭祀の場所があったのかもしれません。

落ち込み２は調査区の北東寄で見つかりました。長径 1.8m、短径 0.9m、深さ約５㎝です。遺物は出土しませんでしたが、建物３より古いものです。

落ち込み３は１号墳の東側裾近くで見つかりました。長さ5.0m、幅 1.2m、深さ0.7mです。落ち込みの底には砂がたまっており、その上は埴輪の大きな破片や石を含んだ土で埋め立てられていました。古墳時代後期の土師器・須恵器・埴輪が出土しましたが、埴輪は角がすりへったものばかりでした。古墳が造られた後のある時に、大雨などで墳丘を切り込むように水の流れができたと考えられます。

まとめ

今回の発掘調査では古墳時代後期の古墳が３基見つかりました。しかも１号墳は埴輪を持つ古墳でした。これらは奈良時代頃には既に地上から姿を消していたと考えられます。今までこのあたりには古墳群が存在していたとは知られていませんでした。ただ阪急の線路南側の郡家町字西平野には「伊賀塚」という古墳がかつて存在しており、しかもその周囲にはさらに数基の古墳が存在していたと伝えている江戸時代の文献（『摂津誌』）もあります。少し距離が離れており、間に新田川が流れていますが、今回見つかった古墳とそれらが同じ古墳群であった可能性も考えられます。

掘立柱建物は６棟見つかりましたが、そのうち奈良時代頃の建物は４棟ありました。しかもその建物が建てられた頃に古墳の上部が削られていた意味は重要です。というのも奈良時代から平安時代頃の掘立柱建物は山手幹線南側の郡家遺跡でも見つかっています。それと同じ頃の建物が丘の南西側斜面地に建てられ、しかも近くの古墳を壊してまで建物周囲の平坦地を作る必要があったということになります。その理由は明確ではありませんが、遺跡の場所が極めてながめのよい場所であるため海側を見下ろす意図がうかがい知れます。

これらの他に弥生時代の遺構もいくつか見つかっております。また埴輪や奈良時代の土器にも混じって弥生土器も出土しています。ただ竪穴住居などが見つかったわけではありませんが、出土した土器の量から近くに弥生時代の集落が存在していたと思われます。その場合遺跡が極めてながめのよい場所に立地していることから、北側にあった尾根の上にかつて高地性集落が存在していた可能性も考えられます。